

海の森づくり推進協会令和4年度 活動報告

堀 田 健 治

はじめに

コロナ禍で、以前のようにシンポジウムなど会員が一堂に会する機会もなく、役員会も開けない状態から、協会としての活動も低調にならざるを得なかった。昨年、オンラインシンポジウムが成功したことから、本年度第20回のオンラインシンポジウムを企画した。加えて、ロシアによるウクライナ侵攻により、国際社会は大きく変わり、これの影響で、日本とロシアとの関係も悪化。かつて協会では、これまでコンブに関するサハリンやウラジオストックなどの大学との交流から、特にサハリンに協会として視察団を送りコンブ交流を行うなどの企画があり、コロナ禍終了を待ち望んでいたが、今はこの構想もついていた感がある。本年も個人や研究会を中心として自主的に継続してきた活動について報告する。

本年度成果物：① 第20回海の森づくり講演集、② 海の森づくりニュースレター

1. 種糸斡旋事業

今年も全国各地から種糸斡旋の注文を受けた。以前は漁協が中心であったが、個人や学校が注文するケースが見られた。協会としては斡旋手数料収入となっている。

ワカメ 30 枠 (450m) @ 3300円/枠

コンブ 32 枠 (1600m) @ 11555円/枠

本年度は種糸長は2,000mであった。

2. 第20回 海の森づくりシンポジウム

11月12日(土)9時から17時、日本大学理工学部を会場として、第20回オンラインシンポジウム、テーマ：「新しい海藻食品業の現状と磯焼け・藻場再生へのチャレンジ」が開催された。

近年、世界的に海藻食品産業は活発化しており、売り上げも右肩上がりの状況を呈している。これらは健康ブームの影響とともに近年も生化学分野でのIT、AIを用いた技術革新が進み、新しい要請にこたえつつ、一方において、資源不足の傾向を背景にしての活況といえよう。

第1部「新しい海藻食品業の現状」では、1) キリンサイからカラギーナンと海藻液肥、2) 海藻由来多糖 “寒天” の現状と可能性、3) アルギンサンの利用分野の講演があり、第2部の「磯やけと藻場再生のチャレンジ」では、1) 磯やけ対策ガイドライン、2) 宮

城県における磯やけ対策とその成果、3) 函館天然真コンブの藻場再生の今、4) コンクリート海岸構造物から流出する成分が藻場に及ぼす影響、5) 水溶性フルボサン鉄とブルーカーボン、と題する講演が行われた。

3. ニュースレターの発行

通巻21号「海の森づくりニュースレター」が以下の内容で発行された。

- 1) ブルーカーボンとカーボンオフセット制度
- 2) 元気回復事業・黒潮牧場20号の現場だより
- 3) 事務局報告（種系、ニュースレター、シンポジウム報告、HP）
- 4) アカモク研究会報告
- 5) 土佐湾・幡多郡黒潮町漁港内で、小型リーフボウル藻礁の設置報告
- 6) カラギーナン原料の紅藻ネットイキリンサイ葉体の室内培養による成長
- 7) 参議院議員 横山信一殿への海の森づくり推進協会からの要望
- 8) 海の森づくり推進協会からの要望と農林水産省、環境省および文科省からの回答
- 9) 理事と役員一覧、会員募集のご案内
を内容として発行した。

4. 研究会報告

アカモク研究会は、千葉における天然アカモクの種苗生産を目指すことから始まったものであるが、その前身のコンブ育成は、今年で18年目となる。一昨年、実施したコンブ育成は、温暖化による水温上昇が原因で全滅の状態であり、千葉で始めて以来の出来事であった。本年度はやや生育した種系をさらに生簀で養生させた後、糸約60mを3cmに切り、2.5mロープ32本に装着し1月14日、千倉港内の浮き生簀に固定した。水温は19~21度、その後順調に生育し、4月の収穫時には10,000kgを収穫した。このままさらに生育すると思われ、ロープ4本のコンブを、外洋とつながっている生簀に移設し、生育を6月14日まで観察し、その後収穫した。コンブは肉厚(2~3mm)、長さ(最大3m)とさらに成長した。これを当協会の会員である海藻業者に見ていただいたところ、使えるとの評価であった。4月に収穫するのは、しゃぶしゃぶ用あるいは塩蔵としてのニーズが高いことから、柔らかいうちに収穫であった。

肉厚になると乾燥させてもしっかりしたものとなり、保存もきくことから、出汁なども取れる可能性が出てくるなど使い方に多様性が出てくることが期待される。

本年度、種付けに参加した人は、3グループ35名で、多種で多様な活動をしている人達が、体験を含めて参加したが、来年も参加したいとのことで、収穫時にはコンブを持ち帰りとなった。

千葉でも磯焼けさらに温暖化に伴う食害など海藻が減少しつつあり、この状況は房総半島の外房と内房とで全く違う様相を示している。この状況について、千倉にある千葉県水産試験センターと交流、我々のコンブ育成現場を視察いただき、リーフボウル構造物による回復など、今後の千葉の海づくり連携について打ち合わせを行った。

5. ホームページ

本年度は、シンポジウムのテーマに関わった投稿や記事が寄せられ、料理や効能なども合わせ、得難い情報となっている。4月11日から12月8日まで、8件の記事が紹介された。

なお、シンポジウムの講演、DVD、その他ニュースレターについても初回から過去第1回から21回までのものが収録され、協会の歴史をうかがい知ることができるようになっている。以上、ホームページはIT担当山崎孝寿理事が中心となってまとめた。

6. 九州支部活動

令和3年からリーフボウルを用いた実証実験が、九州を中心に行われている。特にリーフボウルに水溶性フルボ酸を用いながら、藻類の生育を助長させ、さらにこれに母藻を巻き付けたり、すでに藻類が付いたものを移設させることにより藻類回復を図る方法などが試みられている。シンポジウムではその成果が発表された。

毎年、1年間の活動詳細は、年度末に発行している、ニュースレターに記載されているので、シンポジウム講演集とともに参照されたい。

以 上